

Oral (Theme) | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

🎧 Wed. Aug 27, 2025 3:30 PM - 4:30 PM JST | Wed. Aug 27, 2025 6:30 AM - 7:30 AM UTC 🏠  
Room2206(Education and research building block2 2F 2206)

**[1a702-04] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表①**

Chair:Takeshi Yokoyama

3:30 PM - 3:50 PM JST | 6:30 AM - 6:50 AM UTC

[学校保健体育-A-01]

「良質な体育」と学習指導要領における体育の安全をめぐる解釈の差異（教）

\*Yuki Nakamura<sup>1,2</sup>, Akihisa Umezawa<sup>3</sup> (1. Kyushu Kyoritsu University, 2. The United Graduate School of Education Tokyo Gakugei University, 3. Yokohama National University)

3:50 PM - 4:10 PM JST | 6:50 AM - 7:10 AM UTC

[学校保健体育-A-02]

インクルーシブな体育授業における児童のアライシップ（教,ア）

\*Taiga Hagiwara<sup>1</sup> (1. Himeji city Mizukami Elementary School)

4:10 PM - 4:30 PM JST | 7:10 AM - 7:30 AM UTC

[学校保健体育-A-03]

文化的・言語的に多様な児童生徒を含む体育授業におけるCulturally Responsive Teachingに関するシステマティック・レビュー（教）

\*Takafumi Tomura<sup>1</sup> (1. Fukuyama University)

Oral (Theme) | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 Wed. Aug 27, 2025 3:30 PM - 4:30 PM JST | Wed. Aug 27, 2025 6:30 AM - 7:30 AM UTC 🏢  
Room2206(Education and research building block2 2F 2206)

**[1a702-04] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表①**

Chair:Takeshi Yokoyama

3:30 PM - 3:50 PM JST | 6:30 AM - 6:50 AM UTC

**[学校保健体育-A-01] 「良質な体育」と学習指導要領における体育の安全をめぐる  
解釈の差異（教）**

\*Yuki Nakamura<sup>1,2</sup>, Akihisa Umezawa<sup>3</sup> (1. Kyushu Kyoritsu University, 2. The United Graduate School of Education Tokyo Gakugei University, 3. Yokohama National University)

体育は身体活動を伴う教育であり、子どもの怪我や事故のリスクは少なからず存在する。日本スポーツ振興センター（2024）によると、各教科等で起きる負傷件数のうち、体育は小学校で71,081件（82.3%）、中学校で70,152件（94.1%）、高等学校で45,988件（95.8%）と報告されており、各教科等の事故は約8割～9割が体育で起きている。したがって、体育の安全をめぐる問題は、体育科教育学分野において長年にわたり指摘されてきた課題でもある。実際に、UNESCO（2015）が提唱する「良質な体育（Quality Physical Education）」では、「子どもの安全・保護」、「身体リテラシー」、「包摂・共生」（梅澤訳，2020）の3つが主要な要素であるとされており、体育の安全は「良質な体育」を保障する中核に位置づいている。

他方、文部科学省（2021）は「令和の日本型学校教育」において、子ども個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、子どもが自らの学習状況を把握し、主体的に学習を調整する「個別最適な学び」や「協働的な学び」の充実を求めている。体育においても、子どもが自身の状況に応じて主体的に運動に向かう学習や、子どもの個性や能力に応じて協働的に学習を進めていく教育が求められている。このような体育学習が求められる中、体育の安全をどのように保障していくのか、学習観の変容と併せて安全の在り方を問うていく必要があるだろう。

かかる問題意識から、本研究では、UNESCOの「良質な体育」と我が国の学習指導要領における体育の安全をめぐる解釈の差異を比較検討することを通して、「令和の日本型学校教育」における良質な体育の安全の在り方を検討するための基礎的知見を得る。詳細は、当日に報告する。

Oral (Theme) | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 Wed. Aug 27, 2025 3:30 PM - 4:30 PM JST | Wed. Aug 27, 2025 6:30 AM - 7:30 AM UTC 📍  
Room2206(Education and research building block2 2F 2206)

## [1a702-04] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表①

Chair:Takeshi Yokoyama

3:50 PM - 4:10 PM JST | 6:50 AM - 7:10 AM UTC

[学校保健体育-A-02] インクルーシブな体育授業における児童のアライシップ（教、ア）

\*Taiga Hagiwara<sup>1</sup> (1. Himeji city Mizukami Elementary School)

我が国では、共生の視点を踏まえたインクルーシブな体育授業が目指されている。その一方、障がいのある学習者が、通常の学級での体育授業において見学や得点係といった身体活動を伴わない形式で参加している事例がある（澤江，2020）。これは教材が障がいのないことを前提に構成されているという特権を孕んでいることに起因している可能性がある。つまり、障がいのある学習者は、通常の学級での体育授業においてマイノリティとしての処遇を受けているといえよう。

マイノリティに対して、「特権集団の人々の中で、自らの意思で非抑圧集団の人々の権利を支持する、あるいは社会公正を求めて立ち上がることを選択する人々」はアライと呼ばれる

（グッドマン，2017）。インクルーシブな体育授業に当てはめれば、アライは、障がいがないという自覚を通して障がいのある学習者の抑圧を改善しようと働きかける通常の学級の学習者個人または集団と定義できよう。そこで本研究では、インクルーシブな体育授業における障がいのない児童のアライシップを明らかにすることを目的とした。

対象は小学校4年生の1クラス30名の児童であった。この内、1名は特別支援学級に在籍し、日常的に通常の学級で体育授業に参加していた。本研究では、キャッチセット・アタックプレルボール（岩田ほか，2011）を教材としたネット型ゲームの様子を観察した。発表者は授業者として携わり、授業中の出来事や児童の様子メモ、児童へのインタビュー等をもとにフィールドノーツを作成した。分析はフィールドノーツにグラウンデッド・セオリー・アプローチ（シャーマズ，2020）を施した。

結果、アライシップは共に学習することへの葛藤を起点としていた。その後、障がいの理解を深めることを通して共に学習することを追求し、障がいのある児童の学習参加に向けた行動として補助具を作成した。

Oral (Theme) | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

🌱 Wed. Aug 27, 2025 3:30 PM - 4:30 PM JST | Wed. Aug 27, 2025 6:30 AM - 7:30 AM UTC 🏠  
Room2206(Education and research building block2 2F 2206)

**[1a702-04] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表①**

Chair:Takeshi Yokoyama

4:10 PM - 4:30 PM JST | 7:10 AM - 7:30 AM UTC

**[学校保健体育-A-03] 文化的・言語的に多様な児童生徒を含む体育授業における  
Culturally Responsive Teachingに関するシステマティック・レビュー（教）**

\*Takafumi Tomura<sup>1</sup> (1. Fukuyama University)

近年、教育現場では文化的・言語的に多様な児童生徒（CLD児童生徒）が増加し、教員には多様性に応じた包括的な指導力が求められている。なかでも体育は、スポーツ経験や健康観、服装、身体接触、コミュニケーションなど、学習者の文化的背景と深く関わる教科であり、文化的・言語的配慮が欠けると、学習における安全性や倫理性が損なわれるおそれがある。こうした課題に対応するうえで、CLD児童生徒の文化的背景を尊重し、それを学習内容や指導に反映させるCulturally Responsive Teaching（CRT）の実践が国際的に注目されている。今後、日本でもCLD児童生徒の増加が見込まれる中、CRTの専門性を備えた教員の育成は喫緊の課題である。国際的には体育におけるCRT研究が進展する一方、日本ではまだ端緒についた段階にある。そこで本研究では、体育におけるCLD児童生徒への指導に関する教員の経験や認識に着目した国際的研究を対象にシステマティック・レビューを行い、以下のリサーチクエッションに対する洞察を得ることを目的とした。①CLD児童生徒に対する体育指導において教員が経験する課題とは何か、②その課題に対応するために教員に求められるCRTの知識とスキルとは何か、③それらを教員が獲得するためにどのような教師教育が求められるか。文献はScopus、ERIC、EBSCO、ProQuestを用いて検索し、引用文献の追跡も行った。203件から重複を除いた155件をスクリーニングし、最終的に15件を分析対象とした。本研究は、体育におけるCRTの国際的知見を整理し、日本の多文化共生に資する示唆を提供する。